

専門にこだわり 理論と実践の統一を真摯に追求し続けている研究者

学長 秋葉 英則

藤本名誉教授は、本学の創設期の学的基盤を創造し、その土台を築いてくれた先生です（2002年4月—2008年3月）。なお、先生は2000年4月には滋賀大学から名誉教授の称号をおくられています。

藤本文朗先生のご専門は、教育学、なかでも障がい児・者の教育とその権利保障に関する領域です。本誌に集録された主たる研究業績からもわかるように永年にわたる精力的な研究活動は専門にこだわる情熱を感じさせずにおかないものです。しかも、その情熱は権利保障を具体化すべく運動と実践にそそがれ、その到達点は常に歴史的なものと評価されるにふさわしい地平をきり拓いてきたといえましょう。とりわけ、わが国の障がい児・者の教育・研究運動への貢献（1967年8月発足の全国障害者問題研究会の発足とその後の活動、本誌所収の清水寛氏の論稿参照）、そしてベトナムの障がい児・者問題への国際的貢献は先生の偉大なる業績といえましょう（1988年にはベトナム民主共和国ホーチミン市名誉市民、1998年にはベトナム民主共和国人民健康賞の栄誉をうけています）。

藤本文朗先生のこうした研究活動の軌跡は、創設されて日の浅い本学に強く刻印し、学的基盤としての楔を打ち込んで下さいました。

そのひとつはベトナム民主共和国の大学との学術協定の締結（2005年 ホーチミン市立幼児師範学校、2007年 サイゴン大学）とその具体化（シンポジウム、学術情報の交換）、他は健康と福祉職の専門家養成のカリキュラム編成への学問的背景をたしかなものにし短大教育のウイングを拡げて下さったことです。

このような先生のこれまでの足跡は、文字通り本稿冒頭に明示したように“専門にこだわり、理論と実践の統一を真摯に追及し続けている研究者”といえましょう。

本学が藤本文朗先生に名誉教授の称号をおくることができることを誇りにおもいます。

末尾に先生と筆者が隣接領域で共同研究を行えたことに想いをはせ研究者としてのお礼を述べることを赦して頂きたいとおもいます。

それは、教育評価研究でした。

「第1節 教育評価の歴史とその階級性（秋葉担当）

第2節 五段階相対評価法の人間観（秋葉担当）

第3節 教育評価の送別・差別の機能とその止場（秋葉担当） 第4節 教育評価と「能力に応じる」指導（藤本担当）」（所収 現代教育科学研究会編 『国民のための教育科学』第4章 汐文社 1970）

この共同研究をすすめる中での文献研究においてわが国への知能検査導入のルーツをあてるうえで決定的な資料が発見されたのです。それは、わが国の戦前の陸軍がアメリカの選兵の方法として採用されていた知能検査をわが国に導入し、それを“Army Test”（陸軍検査）と命名し用いていたことをつきとめたのです。その文献こそ、飯島茂『日本選兵史』開発社、1943年のものでした。その発見者は、藤本文朗先生です。

今から約40年前、筆者が大学人として走り出し、研究成果による生産物を創造せんとしはじめたころの文献研究の醍醐味を味あわせてくれた出会いでした。それ以後、折にふれ先生の研究に多くを学ばせて頂き今日に至っています。

本学を代表し、かつ一学徒として藤本文朗先生の学恩に深い敬意を表します。ますますのご活躍を願ってやみません。